



# 留学生生活における「つながり」の必要性

——これからの留学生受け入れに向けて

早稲田大学 商学部3年

ささき ひろゆき

佐々木 博之さん

## 1. はじめに

平成20年現在、約12万人の外国人留学生在が日本で暮らしている。2020年を目処に現在の3倍近い30万人の外国人留学生を受け入れると、福田康夫首相(当時)が国会で表明した。この「留学生30万人計画」の背景には、日本を世界により開かれた国とし、世界の変化や多様性を日本の発展に結び付けていくための日本のグローバル化戦略がある。今後、より一層、産学官が連携し、「留学生30万人計画」は遅かれ早かれ達成されるであろう。大学生の約10人に1人が留学生になる計算であり、もはや外国人留学生はあたりまえの存在となるに違いない。

しかし、受け入れの現場では外国人留学生に友達ができにくいことや日本にいるにもかかわらず、日本人学生との交流がほとんどないことを心配する声がある。留学生にとっての日本留学を魅力的なものとするためには、卒業後の就労の機会や教育機関としての魅力、留学費用の多寡などの要素のほかに、生活者としての留学生が充実した社交生活を営めるかどうかも重要な要素であると考えられる。本稿では、日本での留学をより充実したものにするための要素として、他者とのつながり作りを注目し、その意義と具体策について論じる。

## 2. 他者とのつながり

なぜ他者とのつながりが重要なのか。それは留学生にとって日本での留学生活が充実したものになるかどうかは、留学生個人の能力や資質よりも、むしろその留学生を取り巻く環境や具体的な人間関係、言い換えれば、他者とのつながりに左右されるという経験的現実がある

からだ。日本での生活に日本人学生ほど適応できない留学生が、異国の地である日本で暮らし、勉強に励み、留学生や日本人学生と適切な社交生活を営むには、留学生個人の努力だけでは不十分なのだ。以下は、私が国際交流サークルの会員として直接かかわってきた留学生の事例である。

・海外からのAO入試で4月に入学したアジア系留学生。はじめは大学の寮に住むが、寮から大学までの通学時間が長かったため、来日から約1ヶ月後に大学近くのアパートへ引っ越した。一人暮らしを始めてからしばらくして、自宅に引きこもり、授業を欠席しがちになった。大学の担当職員の勧めもあって、彼は寮での生活に戻ることにした。寮では自然と友達ができ、面倒見のよい管理人やRA<sup>1)</sup>のおかげで引きこもることはなくなった。それからは週末になると、近くの公園で寮生の友達と一緒にサッカーをしたり、アメリカ人の寮生が月に2~3度開く、近くのイングリッシュスタイル・バーでのパーティーへ頻繁に参加したりと、寮での生活を満喫していた。

・4月に海外からの一般入試で入学したアジア系留学生。大学に4年間在学することになる彼女は、年に2度、留学生と日本人がチームになって踊りや劇などの出し物をするサークルに所属した。普段、学部の授業などでは日本人学生と知り合う機会が少なかった彼女だが、そのサークルでの活動を通して日本人学生と親睦を深めることができた。仲良くなった日本人学生とプライベートで遊びに出かけたり、ランゲージエクステンション<sup>2)</sup>を行ったりした。日本人学生と交流したことにより、日本についての理解や、日本語能力も向上したが、なにより一生涯の友達を得たことに彼女は満足していた。

## 留学生活における「つながり」の必要性

——これからの留学生受け入れに向けて

・9月に海外から来日したヨーロッパ系の交換留学生。来日の際に、空港から彼が入居する寮までをエスコートしてもらった大学のプログラムを利用した。その時に知り合った当時大学2年生の日本人学生ボランティアとその後も連絡を取り合い、プライベートで携帯電話の購入や履修登録を手伝ってもらったり、大学のキャンパスを案内してもらったりと日本での生活を手助けしてもらった。今では、その日本人学生との関係を中心に交友関係を広げ、多くの日本人学生の友達をもつようになった。

このように、他者とのつながりが留学生の充実した留学生活の基礎となるのだ。同時に、他者とのつながりが留学生のメンタルヘルス問題を効果的に予防する。特に、日本語の学習に関する悩みや母国の代表として期待される悩み、自分が現地の人々から受け入れられていないと感じる悩みといった留学生特有の悩みは、同じ立場である留学生と接することで解消されることが多い。

また、日本人学生とつながりをもつことにより、留学生同士では得にくい社交生活や情報、支援を得やすくなる。なにより、せっかく日本に留学したのだから、日本人学生との交流を通して日本のことや文化、日本人の考え方について知ってほしいと思うのは私だけだろうか。私

の知っている留学生の多くも、日本人学生との交流を望んでいる。そして、留学生と日本人学生の双方が、外国語能力と併せて、多元的なものの見方や考え方を身につけられるようになるだろう。このことは、行政や大学にとって留学生を受け入れる大きな目的の一つでもあるのだ。

しかし、留学生のコミュニティと日本人学生のコミュニティの間には、各々のコミュニティのもつ閉鎖性や排他性によって分断された構造的隙間が存在することが多い(図1)。その構造的隙間が留学生と日本人学生の日常的な接触を妨げ、つながりをもつことを難しくしているという実態がある。そこで、留学生と日本人学生がつながりをもつための方法として私は二つ考える。一つは、留学生を留学生と日本人学生のコミュニティに埋め込み、日常的な交流を通して日本人学生とのつながりを自然に作らせる(図2)。もう一つは、何らかの方法で留学生と日本人の間につながりを作り、そのつながりが媒介して構造的隙間を越えさせる(図3)。

本稿では、他者とのつながり作りの具体的な方法として、寮の設置と運営、日本人学生と留学生のコミュニティ作り、そして日本人学生による学生生活支援の活用を提案する。

図1)

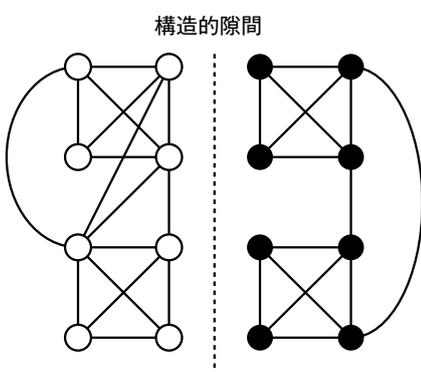


図2)

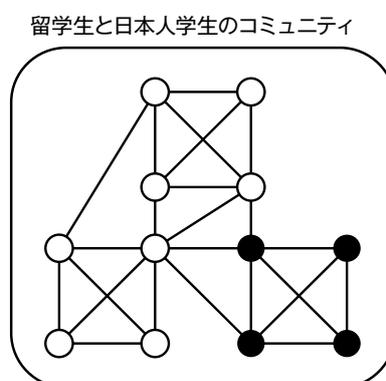
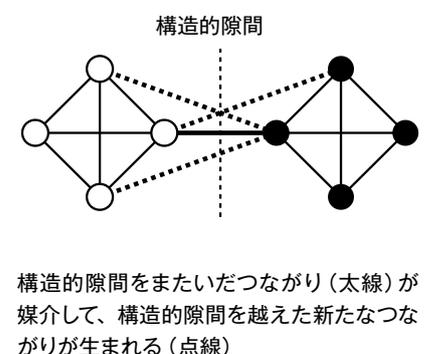


図3)



黒いプロットは留学生を表し、白いプロットは日本人学生を表す。  
各プロットを結ぶ線は、交友関係(つながり)の有無を単純に視覚化したものである。

## 留学生活における「つながり」の必要性

——これからの留学生受け入れに向けて

### 3. 寮の設置と効果的な運営

学生間の物理的な距離が近く、自然発生的な社交生活が生まれやすい寮での生活は、他者とのつながり作りの上で有効だ。しかし、いくら学生間の物理的な距離が近くても、単なる寝床としてしか寮が利用されていなければ大きな効果は期待できない。留学生の文化や宗教、プライバシーに配慮しつつも、寮生同士がつながりをもちやすい場を設けたい。ラウンジや共有のソファにテレビや新聞などを備えたり、共同のキッチン<sup>3)</sup>や浴場を設置したりし、簡単なスポーツを楽しめる体育館、広場などの娯楽施設もできれば設置したい。

また、同室のルームメイトとの関係は、お互いを強く影響し合う。そのため、ルームメイト同士の属性や喫煙の有無などのライフスタイルの相性を考慮して部屋割りを決めなければならない。特に入寮してしばらくは、出身国や大学の学科、クラスなど何らかの共通点をもつ留学生をルームメイトにすることでつながりを強くし、孤独感を防ぎたい。留学生寮の一般的な寮室は二人部屋が多いが、近年はプライバシーの問題や深夜の帰宅などライフスタイルの多様化により、一人部屋のニーズが次第に高まっている。だが、孤独感を防ぎ、共同生活を通してルームメイトとのつながり作りの場を設ける意味では、あえて二人部屋や一つの大部屋を複数の個室で区切った相部屋制が望ましい。

他の寮生とのつながり作りにおいて、寮の管理人やRAが果たす役割は大きい。施設や備品の管理、来客への応対などが管理人の主な仕事ではあるが、管理人やRAが寮生らと積極的にかかわろうとすることも重要である。<sup>4)</sup>そして、単に管理人やRAが寮生とのつながりをもつだけでなく、寮生らのコミュニティの中心的な存在となり、寮生同士を引き合わせる仲介役になるべきだ。積極的に懇親会や年中行事への参加などの交流イベントを企画し、寮生同士がつながり作りを行える場を提供することも管理人やRAの大切な仕事である。

### 4. 日本人学生と留学生のコミュニティ

留学生を受け入れている大学の中には、「コミュニティセンター」や「コミュニティラウンジ」といった、留学生と日本人学生の交流促進を目的とした施設を設置している大学も多い。しかし、実態として閑散としているところもあり、現状ではその役割を十分に果たしているとは言えない。他者とのつながり作りに効果的な場を提供するために、魅力的な設備やイベントを備えたコミュニティセンターにする必要がある。具体的には、明るい雰囲気作りや日本に関する図書、テレビモニター、新聞、ランゲージエクステンションのパートナーを募集する掲示板などを設置することで、日本人学生と留学生に訪れやすい環境を整える。そして、留学生だけでなく日本人学生も興味をもてるような魅力的な交流イベントを開くことも重要だ。大切なのは、コミュニティセンターのような箱物が大学に存在しているかどうかではない。そこに実態としての人間関係をいかに生じさせるかである。

学生サークルは、留学生と日本人学生の構造的隙間を越えたコミュニティになる可能性を秘めている。しかし、学生サークルの多くは、日本人学生で占められた閉鎖的で排他的なコミュニティでしかないのが現状だ。留学生と日本人学生の双方が主体的に活動できるサークルという場を作るためには、大学側がサークル活動においての留学生と日本人学生の理想的な関係を、広く学生に認識させる必要がある。もちろん、そのような認識が学生の間で広く一般的になるまでにはだいぶ時間がかかるだろう。それでも、留学生と日本人学生の双方が主体的に活動できるサークルを大学側が自ら創設したり、留学生を積極的に受け入れるサークルに便宜を図ったりするなど、一步一步着実に、留学生がサークルに参加しやすい環境作りを目指していくべきだ。

## 留学生活における「つながり」の必要性

——これからの留学生受け入れに向けて

### 5. 日本人学生による 学生生活の支援

留学生を受け入れている大学の中には、日本人学生ボランティアと協力して留学生の学生生活支援を行っている大学もある。支援する際の、日本人学生と留学生のふれ合いを通じてつながりが作られるのだ。国際交流サークルと呼ばれる、国際交流に積極的な学生による組織と協力して実施する場合もあれば、学内の学生から広く募集して実施する場合もある。表1は、実際に全国の大学で学生ボランティアと協力して行われている学生生活支援事業の例を、私なりに整理したものである。<sup>5)</sup>

大学は、学生ボランティアを単に労働者として利用するのではなく、留学生と密な交流ができるように配慮すべきであるし、留学生との交流が日本人学生ボランティアへの動機付けになっていることは言うまでもない。

また、せっかく作れたつながりにもかかわらず、その場限りのつながりに終始してしまえば大きな効果は期待できない。留学生とより良い関係を築き、継続的な交流を維持するためには、外国語能力はもちろん、宗教を

含む異文化への理解など留学生とコミュニケーションを取る上で必要なスキルや心構えを日本人学生は身につけた方がよい。これらを身につけさせる教育も、これからの大学教育に必要になってくるだろう。一度できた日本人学生と留学生のつながりを維持することで、図3のように、そのつながりが日本人学生と留学生の各々のコミュニティの構造的隙間を越える媒介役として働く。それにより、本来ならつながりをもつことがなかったであろう日本人学生と留学生が、構造的隙間を越えてつながりをもつようになるのだ。

### 6. おわりに

本稿では、日本で学ぶ外国人留学生の他者とのつながり作りに注目し、その意義と具体策を検討してきた。もちろん、これらは考えられる多くの具体策のほんの一部でしかない。他者とのつながり作りを重視することは、行政や大学が現在取り組んでいる受け入れ政策と相反するものではない。むしろそれらの政策を効果的に補う

図1)

支援事業の種類	(例)
エスコート	・ 来日直後の留学生を対象とした、空港から入居する寮までのエスコート
	・ 寮から大学のキャンパスまでのエスコート
	・ 外国人登録と国民健康保険加入手続きのための、市区町村役所までのエスコート
引率	・ 大学構内の施設の案内
	・ 市内観光の引率
	・ 留学生の就職活動のための企業見学
書類記入補助	・ 外国人登録、国民健康保険加入手続き書類
	・ 郵便局や銀行の口座開設
運営スタッフ	・ 大学主催の留学生オリエンテーションの補助
	・ 日本人学生による留学生のためのオリエンテーション、サークル紹介
	・ 留学生の研修合宿でのスタッフ
	・ 留学生懇親会、地域住民との交流会
	・ コミュニティセンターでのイベント企画、実施
	・ 履修登録相談会
	・ 留学生による日本語スピーチコンテスト

## 留学生生活における「つながり」の必要性

——これからの留学生受け入れに向けて

ものなのだ。今後、行政や大学が他者とのつながりに焦点をあて、積極的な留学生支援を考え、実行していくことが望まれる。近い将来、留学生と日本人学生が分け隔てなくキャンパスの中を行きかうのを願って。

### 文中注

- 1) RAとは、Resident Assistantの略で、寮に住み込みながら留学生の生活サポートや、寮生同士交流の場を企画運営する。多くは留学生と同じ大学の上級生や大学院生が担当する。
- 2) ランゲージエクスチェンジとは、お互いの母国語が異なる者同士がペアとなり、お互いに自分の母語を教え合うこと。語学交換。
- 3) もちろん、留学生の文化や宗教によっては調理器具を分ける必要がある。
- 4) 必要ならば、管理人やRAが定期的に寮室を訪れ、寮生とコミュニケーションを取るとよい。
- 5) また、大学と協力して実施するのではなく、自主的にキャンパスや市内の案内、携帯電話購入の手続きのサポートなどをする国際交流サークルや個人も多い。

### 参考文献

- ・「第二回 国際交流を实践する学生のための研修会 報告書」アトラス—国際交流を实践する学生のための研修会実行委員、2004年
- ・井上孝代、大橋敏子「外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入—JAFSA多文化間メンタルヘルス研究会の活動から」独立行政法人日本学生支援機構 編「月刊 留学交流」2007年10月号、ぎょうせい、p6～9、2007年
- ・加藤智佳子「留学生の生活支援の現状と課題」独立行政法人日本学生支援機構 編「月刊 留学交流」2008年4月号、ぎょうせい、p6～9、2008年
- ・安田雪『ネットワーク分析—何が行為を決定するか』新曜社、1997年